

イチゴ県育成品種‘紀の香’の優良苗生産技術の開発

～ランナー先枯れ、不時出蕾、子株のしおれ防止技術～

1. はじめに

県が育成したイチゴ‘紀の香’は、炭疽病に強く、早生で多収、高糖度・適度な酸味で食味が良い品種である。しかし、ランナー発生数が少ないことに加え、ランナーの先枯れや不時出蕾、ランナー切り離し後のしおれの発生により、優良苗率が6割ほどと低く、良質な苗の確保が課題となっている。

そこで、効率的な苗生産のため、親株および子株の育苗期における適正な管理技術の開発に取り組んだので報告する。

2. 試験方法と結果

(1) 親株の管理

①親株の施肥量

方法 基肥の窒素量が、**①** 1g/株 (N1区)、**②** 3g/株 (N3区)、**③** 4g/株 (N4区)となるように緩効性肥料をプランター培土に混合し、3月下旬に親株を定植した。いずれの区も追肥として6月上旬に緩効性肥料を窒素量 0.3g/株施用した。

結果 基肥の窒素量が少ないとランナー発生数が減少し、多いと先枯れ発生数が増加した。

基肥に緩効性肥料を N3 g / 株、追肥に緩効性肥料を N0.3 g / 株施用することで子株を多く確保できた (表 1)。

表 1 親株における基肥の窒素量がランナー発生数に及ぼす影響

試験区	ランナー発生数 (本/株)	先枯れ発生数 (本/株)	採苗数 ^z (株)
N1区	11.2	5.3	14.7
N3区	15.6	6.4	19.0
N4区	15.3	8.9	17.3

z：親株 1 株あたりの子株採苗数

基肥：エコロング 424-100 を各区の量で 2021 年 3 月 25 日に施用

追肥：いずれの区も IB化成 S1 号を 2021 年 6 月 2 日に窒素量 0.3g/株施用

調査日：2021 年 7 月 19 日、エフクリーンハウス内にて遮光なしで栽培

②親株の葉数

方法 6月1日以降、親株の葉数を**①** 8枚、**②** 12枚、**③** 16枚、**④** 無処理 (黄化した古葉

の摘葉のみ)として管理し、採苗数等を調査した。

結果 親株の葉数を 16 枚以上で管理することにより、ランナーの発生数および採苗数が多くなった (表 2)。

表 2 親株の葉数がランナー発生数、先枯れ発生数および採苗数に及ぼす影響

親株葉数	ランナー発生数 (本/株)	先枯れ発生数 (本/株)	採苗数 ^z (株)
8枚	22.2	2.8	10.3
12枚	25.2	3.4	11.5
16枚	28.3	2.6	12.8
無処理	28.6	3.7	13.2

n=18、苗受け開始日：2022年6月14日、調査日：2022年7月12日

z：親株 1 株あたりの子株採苗数

エフクリーンハウス内にて2022年6月1日からクールホワイト (SW620、遮光率 50%) を展張

(2) ランナー先枯れ対策

①採苗回数

方法 5月10日に発生したランナーをすべて除去し、その後、発生したランナーのうち 1mm 以上発根している子株を 6月2日以降、10～12日おきにイチゴ専用培土を充填した黒色 9cm ポットに受け苗方式で採苗した。ポット受け回数は、**①** 「1回」、**②** 「3回」、**③** 「4回」とし、ランナー先枯れ発生数を調査した。

結果 ポットへの苗受け回数を増やすことで、ランナー先枯れ発生数が減少した (図 1)。

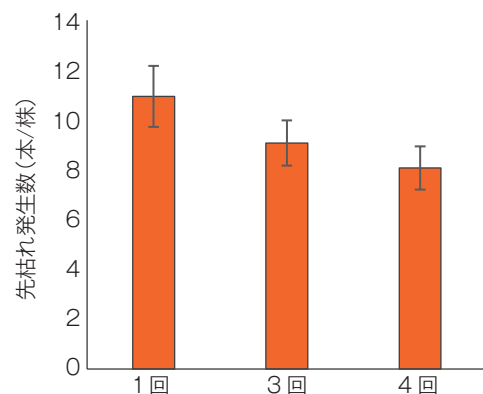


図 1 ポット受け回数がランナー先枯れ発生に及ぼす影響

※エラーバーは標準偏差

ポット受け日

①「1回」：6月2日 ②「3回」：6月2日、6月14日、6月25日

③「4回」：6月2日、6月14日、6月25日、7月7日

調査日：2021年7月19日、エフクリーンハウス内にて遮光なしで栽培

②育苗中の遮光

方法 遮光期間を2水準④長期遮光（6月1日～7月21日）、⑤短期遮光（6月15日～7月21日）、遮光率を3水準⑥30%遮光（クールホワイトSW420）、⑦50%遮光（SW620）、⑧70%遮光（SW1020）とし、遮光期間×遮光率および無処理区で計7処理区を設置した。

結果 ハウス外張り資材の遮光率と合わせて50%程度（POフィルム約15%とクールホワイト30%遮光の組み合わせ）の遮光を行うことで、ランナーの先枯れを抑制できた。ただし、長期の遮光でランナー発生数が減少するため、遮光の開始は6月中旬からとする（表3）。

表3 遮光がランナー発生数、先枯れ発生数および採苗数に及ぼす影響

遮光処理 期間	遮光率	ランナー発生数 (本/株)	先枯れ発生数 (本/株)	採苗数 ^Z (株)
長期遮光 6/1～	30%	20.2	2.4	9.1
	50%	18.1	2.5	8.4
	70%	18.4	2.7	8.7
短期遮光 6/15～	30%	32.0	3.6	11.4
	50%	28.0	3.0	9.5
	70%	26.1	3.3	9.3
無処理区		28.3	4.1	8.2

Z：親株1株あたりの子株採苗数
※POフィルム（遮光率15%）で被覆した簡易雨よけ施設で栽培
遮光率:遮光資材の遮光率 クールホワイト 30%:SW420、50%:SW620、70%:SW1020

(3) 不時出蕾対策

○採苗時期

方法 ①6月14日、②6月24日、③7月4日にポット受けを行った。すべての試験区で、7月20日に子株を切り離し、9月8日に育苗中の出蕾を調査した。

結果 6月14日までに苗受けした子株は、不時出蕾の発生が多かったため、苗受けは6月下旬以降がよい（図2）。

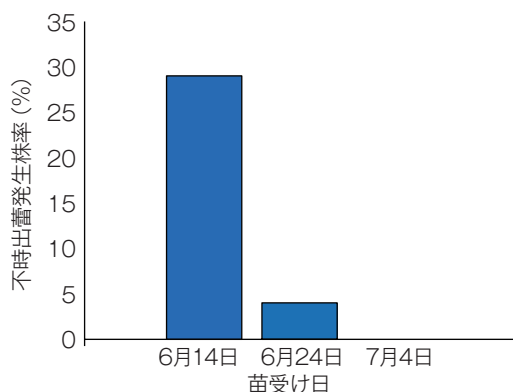


図2 採苗時期が不時出蕾株発生に及ぼす影響
※調査日：2022年9月8日、n=100

(4) 子株のしおれ対策

○ランナー切り離し後の遮光

方法 6月1日からPOフィルムで被覆した雨よけ施設内で、70%、50%、30%、無遮光の条件で試験を行った。7月21日にランナーを切り離し、調査日まで遮光を継続した。

結果 ランナー切り離し後、ハウス外張り資材の遮光率と合わせて50%以上の遮光下で管理することで子株の枯死を軽減できる（図3）。

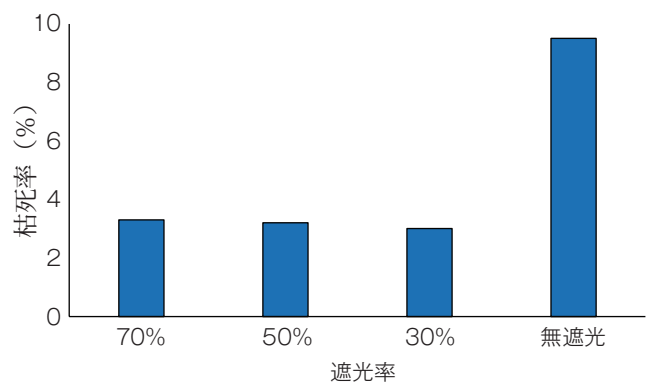


図3 異なる遮光率がランナー切り離し後の子株の枯死に及ぼす影響

調査日：2022年9月2日

※POフィルム（遮光率15%）で被覆した簡易雨よけ施設で栽培
遮光資材:クールホワイト 30%:SW420、50%:SW620、70%:SW1020

3. おわりに

今回の試験結果から‘紀の香’の育苗では、以下について留意することで良質な苗が確保できると考えられた。

(1) 基肥に緩効性肥料をN3g/株、追肥に緩効性肥料をN0.3g/株を施用して、葉数16枚以上で管理することで子株を多く採れる。

(2) 苗受けは6月下旬以降にスタートし、こまめに苗を受けることで、ランナー先枯れおよび不時出蕾の発生を軽減できる。

(3) 6月中旬から育苗終了（切り離し後の子株の管理時期を含む）まで、ハウスの外張り資材の遮光率と合わせて50%程度の遮光をし、こまめな葉かきを行うことで、ランナー先枯れ、切り離し後の子株の枯死を軽減でき、優良苗を生産できる。

(4) ‘紀の香’の栽培マニュアル「特性と栽培のポイント（改訂版）」を、ホームページに掲載していますので参考にして下さい。

「‘紀の香’栽培マニュアル」

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070100/070109/gaiyou/001/nougyoushikenjyou/shikenkenkyuuseika/shikenkenkyuuseika.html>

（栽培部 田中 郁）